

国産電機技術の確立者

おだいら なみへい
小平 浪平 (1874-1951)

日立製作所



『重工業王 小平浪平』
より

§ 人物データファイル

出生

明治7年(1874)1月15日、栃木県下都賀郡家中村大字合戦場かっせんばに生まれる。父は小平惣八、母はチヨ、兄に儀平。

生い立ち

明治13年(1880)に合戦場の小学校に入学、明治18年(1885)に教育環境の整った栃木小学校に転校、父の実家より通学する。栃木高等小学校を卒業後は上京し、明治21年(1888)東京英語学校に入学。明治23年(1890)兄・儀平が在学する第一高等中学校の受験に失敗する。再度の受験を目指して浪人中、鉛丹業を営んでいた父惣八が急逝する。惣八の借金を返済するため、儀平は浪平の進学を条件に第一高等中学校を退学し栃木町の銀行に勤める。明治24年(1891)第一高等中学校に合格し入学。明治29年(1896)同校卒業。知己であった小説家・村井弦斎の助言を得て電気を学ぶことを決意し、帝国大学工科大学電気工学科(後の東京帝国大学工学部)に入学する。1年次に写真などの趣味に興じて落第し、儀平に怒られる。日記『晃南日記』に「ああ晃南生(浪平のこと)、この晃南生は明治三十年七月二六日をもって死す」と記す。以後、学問に精進し、明治33年卒業。

実業家以前

明治33年(1900)大学卒業後、藤田組小坂鉦山(秋田県鹿角郡)に入社。所長は久原房之助くはら。米代川水系の止瀧発電所の建設に参加し運転を成功させる。明治37年(1904)退社、大学時代の友人・小室文夫の妹の也笑やえと結婚する。同年、広島水力電気(現・中国電力)に入社。明治38年

(1905) 長女・百合子誕生。東京電燈（現・東京電力）に入社。駒橋水力発電所の工事に送電主任として携わる。明治39年（1906）、久原房之助が経営する久原鋳業所日立鋳山に工作課長として入社する。中里・町屋・石岡の発電所、大雄院^{だいおいん}の製錬所などの建設に携わる。この間、外国製の電動機・変圧器などの電気機械の修理を行った。修理工場の建物は丸太の掘立小屋に近いもので日立製作所創業小屋と呼ばれている（日立製作所日立工場内に復元されている）。明治43年（1910）には国産初の5馬力モーターを3台製作する。1台は日立市の小平浪平記念館に現存する。また、この頃、日立製作所の創業期を支えた高尾直三郎（後に副社長）、馬場桑夫（後に専務）らが入社した。小平は明治41年（1908）より大雄院の役宅に住み、也笑、百合子と同居している。同年、長男・良平誕生。

実業家時代

明治43年（1910）11月、久原房之助と交渉し日立鋳山内に電気機械製作工場を設立。地名より「日立製作所」と命名し、この日を現在、日立製作所の創業としている。創業時の従業員は約400名。これに先立つ同年4月には従業員教育を行う徒弟養成所を設けて、人材の育成にあたった。明治45年（1912）日立鋳山より分離して久原鋳業日立製作所となる。倉田主税^{ちから}（2代目社長）が入社する。その後、大正5年（1916）には発電機破裂事故を起こし進退伺いを書き、大正8年（1919）には大物工場^{おおもの}の変圧試験場で大火災を起こすなど、必ずしも順調ではない。

大正7年（1918）、久原鋳業佃島製作所を合併した際に、本社を東京に移転する。小平も東京の本郷区駒込に転居。同年、技術雑誌の先駆ともいえる『日立評論★』を創刊する。大正9年（1920）久原鋳業から独立し株式会社日立製作所となる。創業時、社長は空席で小平は専務取締役。大正12年（1923）の関東大震災復興時、茨城県は比較的被害が少なかったこともあり、東京電燈、鉄道省などから変電設備・変圧器・発電設備をはじめ多くの注文を受け、評判を高めていった。大正13年（1924）、電気機関車の公開試験運転に成功し、のちに3両を鉄道省に納入する。大正15年（1926）、日立製品としてはじめて扇風機をアメリカに輸出する。

昭和3年(1928)、母チヨ死去。昭和4年(1929)に日立製作所社長に就任した。この頃、世界金融恐慌で業績が悪化するが、昭和肥料(現・昭和電工)の水電解槽設備を受注する。国産技術での製造は不可能とされていたが昭和6年(1931)に完納した。昭和8年(1933)には特許係を設け、昭和9年(1934)には日立研究所を設置するなど、技術開発に力を入れる。昭和12年(1937)には国産工業と合併し7工場を設置。戦時期には軍需工場となり兵器などを生産する。昭和17年(1942)東京・国分寺に中央研究所創設。昭和19年(1944)兄・儀平死去。第二次世界大戦末期は自動車の利用を拒み満員電車で通勤した。昭和20年(1945)空襲で東京の自宅が被災、また、茨城県内をはじめ多くの工場が空襲や艦砲射撃で甚大な被害をうける。終戦後の昭和22年(1947)、第2次公職追放にともない社長を退任、倉田主税が第2代社長就任。

社会・文化貢献

小平は福利厚生に力を入れ、昭和13年(1938)日立病院(現・日立総合病院)を開院している。日立工場の従業員だけでなく、家族や地域住民の診療にも応じるものであった。昭和14年(1939)には日立製作所創業30周年記念事業として、国に学校建設資金300万円を寄付し、多賀高等工業学校(現・茨城大学工学部)の設立に貢献した。また、社員にスポーツ活動をすすめ、昭和11年(1936)には日立ゴルフコース(大甕^{おおみか}ゴルフ場)を茨城県に開設。ゴルフ場の敷地の中には大甕陶苑を設け陶器づくりを楽しむようにした。

晩年

昭和26年(1951)、公職追放が解除されて取締役に戻り。7月から8月には、公職追放中に一度も訪れなかった工場視察を行った。9月下旬、右の手首に腫物ができる。リュウマチと診断されたが、妻・也笑の注意を聞かず薪割を続ける。10月4日、関西旅行を見合わせ、自宅にて也笑と夕食後、ラジオの長唄などを聞く。午後9時40分、様子が変わるので医者呼ぶ。翌5日零時15分、事切れる。死因は狭心症。享年77歳。10月9日、青山斎場の葬儀には青山1丁目の駅から吊問の列が延々と続いたため霊柩車が通

れず、関係者が棺を担いで車に運んだ。骨壺は大甕陶苑で作った大甕焼だったという。墓所は東京・谷中霊園。

関係人物

渋沢元治 ^{もとじ} 明治39年（1906）の7月の雨の日、駒橋水力発電所に向かうために乗った甲府行の車中で渋沢元治に出会う。元治は渋沢栄一の甥で東京帝国大学電気工学科の同期。当時は通信省通信局に勤めていた。小平は元治を誘って猿橋の大黒屋に宿をとり、日本で使う機械は日本人が作らなくてはならない、と夜を徹して夢を語りあった。小平が東京電燈を辞めて久原鉱業所日立鉱山に入社とする決意を固めた「甲州猿橋・雨夜の語り」として、日立の歴史発祥の場と位置付けることもある。渋沢元治は後に東京帝国大学教授、工学部長を経て、名古屋帝国大学初代総長。昭和50年（1975）没。

久原房之助 現在の山口県萩市出身。東京商業学校（現・一橋大学）、慶應義塾を卒業後、森村組を経て、伯父・藤田伝三郎の藤田組が所有する小坂鉱山に入社。黒鉱自溶精錬法などを確立し事業を拡大する。退社後、明治38年（1905）に茨城県の赤沢銅山を買収（日立銅山と改称）するなど鉱山経営をすすめて「鉱山王」と称された。久原鉱業を核として事業を拡大し、久原財閥を形成する。義兄は日産コンツェルンの創始者・鮎川義介である。昭和に入ってから政界に進出。通信大臣や大政翼賛会総務などに就き、政界の黒幕といわれた。戦後も衆議院議員を一期務めた。昭和40年（1965）没。

倉田主税 仙台高等工業学校（現・東北大学工学部）を卒業後、久原鉱業所（のち久原鉱業）日立製作所に入社。小平のもとで、おもに電線の製造に携わり、電線工場の工場長に就任する。小平らが公職追放された昭和22年（1947）、笠戸工場長から日立製作所2代目社長に就任し、14年間務める。退職金を投じて財団法人国産技術振興会（現・倉田記念日立科学技術財団）を設立。また社長在任中には日本科学技術振興財団初代会長にも就いた。昭和44年（1969）没。

村井弦齋 本名は村井寛。新聞記者・小説家として活躍、『食道楽』などベストセラーがある。明治20年（1887）頃、弦齋が栃木県に滞在中、小平に文章規範の素読を教えて以来、親交を持つ。小平の大学進学に際しては、電気工学を専攻するようにアドバイスをする。明治37年（1904）、平塚駅南側（現在の平塚市八重咲町・松風町）に16,400坪の土地を入手し転居。菜園・果樹園などが設けられた村井邸は食のサロンとなり、小平をはじめ、大隈重信、鈴木三郎助、岩崎弥之助（弥太郎の弟）など政財界の有力者が常連となった。昭和2年（1927）没。昭和7年（1932）多嘉子夫人が平塚の土地を売りに出した際、小平はほとんどを買い取り別荘とした。

エピソード

小平の趣味はゴルフであった。大正13年（1924）に健康のためにはじめてだが、交友にもいいスポーツなので社員にもすすめた。「俺は死ぬならゴルフ場でゴルフをやりながら死にたい」と笑い話をするほどだったという。ゴルフ仲間である元国務大臣の下村宏（海南）は『小平さんの思い出』で次のように記している。

「小平君のゴルフはいつやっても大体は似た成績である。とにかくスタンスのとり方からクラブの振り方まですべて同じ型をくりかえしているのだから、機械が動いているような感じを与える。だから小平君とゴルフをやってもなんの変哲もない。小平君とやっても面白くないといって不愉快ということもない。決して邪魔にならない。小平君のゴルフのようなあんな機械的なゴルフは他に見出すことはできない。まさしく小平君はゴルフまで日立式で一貫したのであります」

キーワード

『日立評論』 大正7年（1918）、日立製作所創業から8年目にして技術研究雑誌を創刊した。当時、設計係長だった馬場糸夫の主導で刊行され、我が国の企業技報のさきがけともいえる。小平は昭和7年（1932）の第14巻第5号の巻頭「日立評論十五周年に際して」にて、技術を秘密にせず公開する意義などを述べている。『日立評論』は現在も刊行され通巻千号を超えている。

神奈川との関わり

昭和12年（1937）5月、国産工業を吸収合併して、日立製作所戸塚工場（現・横浜市）を創業する。創業時は、電話機・交換機のほか、電気ドリル、削岩機、自動車用電子部品などを作成。戦時中の昭和18年（1943）8月には激励のため小平も視察している。また、先述のように小平は平塚に別荘を持っていたが、昭和20年（1945）に爆撃で焼失する。現在は小平浪平別荘跡の碑が立つ（碑文は渋沢元治による）。

§ 文献案内

著作

『晃南日記』 小平浪平翁記念会 1954 〈K〉

小平が明治26年（1893）から同32年（1899）まで記した青年期の日記。

『身边雑記 小平浪平遺稿』 小平浪平翁記念会 1954 〈K〉

小平が子供・孫のために描いた私的な冊子を刊行したもの。

社史

『日立製作所史1』 日立製作所 1949（改訂版1960）〈Y、K〉

『日立製作所史2』 日立製作所 1960 〈Y、K〉

1巻は創業前から昭和13年（1938）まで。2巻は昭和14年（1939）から同35年（1960）までを扱う。題字は小平による。1巻の「はしがき」には渋沢元治が小平との甲州猿橋・雨夜の語りへの思い出を書いている。現在、『日立製作所史』は5巻（2010）まで刊行。

『写真集 時代がもとめ、時代にこたえた日立の75年』 日立製作所 1985 〈Y、K〉

戦前の会社の様子がわかる写真を多数収録。

『ひとの日立 日立のひと』 日立製作所 2002 〈K〉

第14章「日立製作所のふるさと 創業者・小平浪平」。

『写真でたどる日立百年のあゆみ 日立鋳業創業105年・日立製作所100年』 日立郷土資料館 2011 〈K〉

戦前の写真が中心。日立製作所の創業小屋の写真なども収録。

『開拓者たちの挑戦 日立100年の歩み』 日立製作所 2010 〈K〉

小平の若き日の写真なども多く掲載している。

伝記文献

『重工業王 小平浪平』 加浪晒三著 龍崖社 1939 〈K〉

『小平さんの思い出』 小平浪平翁記念会 1952 〈K〉

五島慶太、鮎川義介ら親交のあった有力者、友人・知人、日立製作所の関係者、家族・親族が小平の思い出を記している。

『日本の電機工業を築いた人・小平浪平翁生涯』 藤田勉著 国政社 1962
〈K〉

『日立とその人々』 高尾直三郎著 高尾直三郎 1965 〈K〉

小平を支えた高尾直三郎の回想録。小平にまつわるエピソードも多い。

『技術王国 日立をつくった男 創業者・小平浪平伝』 加藤勝美著
PHP研究所 1985 〈K〉

参考文献

『時代の先駆者 よみがえる村井弦斎 明治の実用小説家』 平塚市博物館 2000 〈Y、Yかな〉

<高田高史>